

バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第 145 号 [2017 年 3 月]

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8 章 22 節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』
+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+・・・+
主の聖名を賛美します。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第 145 号をお送ります。今月は DVD 映画鑑賞を通して神様の恵みについて考えました。鑑賞したのは椎名姉おすめの『天国からの奇跡』ある女の子の実話です。

10 歳のアナベル・ビームは神様をまっすぐ見つめて信頼する少女だった。そしてある日、突然の嘔吐と腹痛をもよおして病院に行きますが、診断はいつも「急性胃腸炎」。しかし、何週間も悪化し続ける娘を見る親には、これは急性胃腸炎などではない。病院の緊急外来で怒りを爆発して若い医師を叱り飛ばす母。そして現れたベテランの医師により、ようやく病名が明らかになった。

「アナベルには食事を消化できない難病、機能的胃腸障害を患っています。治療法はないのですが、ボストン小児総合病院のサムエル・ヌルコベル医師なら助けてくれるかもしれません」病気から解放してくれるのは死しかない、そういう事だった。

それからの家族の戦いは壮絶そのもの。母クリスティは予約が取り付けられないままボストン小児総合病院に乗り込み、泣きながらの押し問答の末に強引に診察を受けて入院するが、実は一家はテキサスで獣医病院を開設するのにすべての資産を担保にしたばかり。そのうえ高額な医療費と渡航費がかさみ、家庭は破産寸前に追いやられる。それでも病気は治らない。しかしてできるだけの処置をしていったんテキサスに帰宅したあとで、事件が起きた。

アナが庭の一角にある大木に姉と一緒に登った時、その木のうろに、10メートル以上の高さから落下して意識を失ってしまう。救急車、消防車、はしご車、ニュース記者やアナウンサーまで駆けつけて大騒ぎになる自宅の庭で、母クリスティは絶望に打ちひしがれる。祈る言葉も失い、木を抱きかかえるようにして涙ながらに主の祈りを祈るクリスティ。家族や友人がその祈りに加わっていく。



神様、娘をお助けください。天にましますわれらの父よ、みなをあがめさせたまえ。。。

ビーム一家が緊急事態に遭遇するたびに、そっと手を差し伸べる友人たちの存在がある一方で、同じ教会に通う信仰の友なのに、彼らに冷水を浴びせるような言葉をかける人々もいる。この映画はそうした人間像を忠実に描きながら、かなり迫力のある映像でビーム一家の悩み苦しさと、苦境と戦う夫婦の努力、そして神の奇跡に打ちのめされる人々を描き上げている。母クリスティの最後の証は、この映画が実話であることから非常な説得力をもっている。

「娘が病を患って以来、私は希望を失い、孤独になり、祈りに応えてくれない神に怒りを覚え、神を疑い、教会と疎遠になりました。そして、そのせいで周りが見えなくなりました。アインシュタインが言った言葉、「人生には 2 種類ある。奇跡がないと思って生きるか、すべてが奇跡だと思って生きるか。」私は前者だったので多くを見逃していましたが、今思うと本当はすべてが奇跡でした。奇跡とは、人のやさしさです。たまたま出会った人たちの優しさが奇跡の力であり、愛だということを、そして奇跡は神だということを知りました。そして神は赦してくださる。今回の経験でわかったこと、それは、私はひとりではないということ。同様に、皆さんに何があろうと誰も独りではないのです。奇跡を通じて神がその存在を伝えていくのです。」

人生の中で誰でも経験する孤独でつらい体験の中で、この映画が語り掛ける「あなたは独りではない」というメッセージが、苦境を乗り越える原動力、神とのつながりへととなりますように。

映画のトレーラーはこちらから。 <https://www.youtube.com/watch?v=HDzdPgijyqUE>